

諫早干拓推進論のウソ

騙されるな「防災のため」

「諫早干拓は失敗。嘘つき農水官僚の無定見極まる」

十五年前、農林水産大臣が断言した。

「防災」を掲げて農水官僚が推進署名を指揮する背後で、既成の干拓地の排水門は錆びついたままだ。

編集部 長谷川照 写真 芥川 仁

七ヶ余の「潮受け堤防」で締め切られた諫早湾の内側に舟を進めた。潮の干満から断ち切られ、生き物の動きが止まりつつある死の水面、死の干潟だった。汚れた河

川水が溜まって、ある水位を超すまでは、干潮の時も堤防の水門は開けることがないので、水質も悪化している。干潟の広がった諫早湾を国営事業

業で干拓しようとしているのは農林水産省で、協力しているのが長崎県当局と長崎県の諫早市、北高来郡森山町などの関係者だ。六月二日午前九時から、人口六



諫早湾を締め切った「潮受け堤防」の象徴「ギロチン」は石材で覆われつつある。干潟の生命をこの「壁」が殺す

千三百の森山町で課長会議が開かれた。出席者によると、干拓事業を推進するために諫早市、森山町などで行われた署名集めのことも議題になった。六月七日に諫早市で開かれた「諫早湾干拓事業推進住民総決起大会」を盛り上げる目的も、この署名運動にはあった。

課長会議の席で橋村松太郎町長(左)が、森山町の誰が署名しなかったか全部調べるよう命じた、という情報が町内で耳に入った。事実なら、刑法第一三九条の「公務員職権濫用罪」の疑いも出てくる。非署名者の村八分につながる危険性をはらんだ行為でもある。

「むじろくさるへ
……死んで下さい」

橋村町長は三十歳で初当選し、いま六期目に入ったところだ。二期目からは対立候補がなく、無投票で当選している。父親もこの町長だった。

課長会議での指示の真偽を確かめるために町役場に橋村町長を訪ねたが、出張で不在だった。二日後に電話したら、来客中ということで電話口には出ず、取り継いだ鎌田知也総括理事(右)に、「そんなこと言ったかないな。覚え

ていない」と答えた、という。

鎌田総括理事は、農林水産省から九六年四月に向向してきた農業土木職の官僚で、「むじろくさるへ……死んで下さい」と結んだ諫早湾干拓促進の呼び掛けを、職名を隠し、「地元民」と偽ってパソコン通信に流した人である。

町長にはその後も役場、自宅に電話したが、会議中か不在だった。ただ、「町長側近」といわれる林田直記総務課長は、「非署名者割り出し」の指示について、「具体化していない。どういう意図か町長に聞いてみないと……」と述べ、町長発言を認めた。

課長会議の出席者によれば、橋村町長は署名率を上げるために「役場管理職による率先垂範」の号令もかけたそうだ。

鎌田総括理事も、行政機関としては署名運動に表立ってかかわれないが、地区長を通して推進する旨の説明をした。実際に、地区長を集めて署名用紙を配り、回収したのは鎌田総括理事だ。

森山町には七つの地区があり、地区の中に幾つかの部落が、部落には幾つかの班がある。部落がなく班だけの地区もある。地区長は、「役場出張所長」とも言うべき権限を事実上担っている。

このような森山町の各地区で、地区長―部落長―班長の経路によって署名運動の実施が伝達され、用意された用紙への署名を班長、所によっては部落長が各々に求め

て回った。実質的には公権力による署名集めだ。宛名は「農林水産大臣藤本孝雄様」だから、行政側の自作自演のようなものだった。

故農水相事業停止主張 官僚が抵抗、阻止

鎌田総括理事は、森山町地区長の会長に、署名の強制はしないように伝えてあることを強調するが、上意下達を拒める住民は、地域社会では極めて稀だろう。

七日の総決起大会への動員人数も各班にまで割り当てが降ろされ、実際にある主婦は班長に出席を促されたが、それだけは断った。しかし、その主婦も署名の方にはした。主婦は、「もう手を挙げて、ではないけれ

ど、やはり、この土地に住んでいる者として……」と洩らす。

この署名集めも含めて、本来私的なのは干拓推進運動の司令部が、少なくとも森山町の場合は、役場の鎌田総括理事の席に置かれていることは明白である。この総括理事自身が、「私の机が使われている」という言い方で認めている。

諫早湾干拓事業の見直しを求める民主党側に地元推進派が公開質問状を出したことがあるが、森山町の西村清貴町議会議員(自)の下書きを鎌田総括理事が添削した。

西村町議は、諫早湾に面した森山町「干拓部落」(小字の名前)の入植者の後継者で、諫早湾干拓事業の地元推進派の旗頭だ。西村

町議も、推進派の諸文書が鎌田総括理事との共同作業でつくられていることを否定しない。

千二百坪にわたって鉄板を次々と落下させる作業が四月十四日に行われ、諫早湾の約三分の一を有明海から断ち切る「潮受け堤防」はつなごうとした。農水省側、長崎県側の資料によれば、二〇〇〇年までに、「潮受け堤防」内側の三千

五百五十坪のなかに一千四百七十七坪の農地などを造る。残りは調整池となるが、海水が、「潮受け堤防」の二つの水門の操作で徐々に河川水と入れ替わって淡水化し、農業用水に利用される。

総事業費は、二千三百七十億円へと当初の予定から一千二十億円も増えたが、それで済むのかはまだまだ分からない。

戦後間もない四十四年前に、一万余坪と諫早湾の大半を締め切つてその多くを水田に変える長崎干拓事業として出発したのが、この国営事業のそもその始まりだ。

しかし、コメの生産過剰に見舞われたため、畑の造成へと目的を変え、長崎南部地域総合開発計画として二十七年前に再出発した。

それが十五年前に、長崎県第二区選出(当時)の自由民主党衆院議員、故金子岩三氏が農林水産大臣に就任し、一挙に規模を約三分の一に縮小した。いまの事業がほぼそれに当たる。

故金子大臣自身は、この干拓事業の動機にかねて不審を感じていて、原則的に事業の全廃をめざしたが、担当の森実孝郎構造改善局長、松本作衛事務次官といった農水官僚らが、事業の防災機能なるものを持ち出して執拗に抵抗し、大臣の事業全廃の基本方針を葬った。この事に限らず故金子大臣は、農水官僚のことを、「嘘つきだ」と言っていた。

高潮、洪水、低地の排水不良への対策を、農地造成と並ぶ諫早湾干拓事業の大目的とする言い方がその前後から強まった。諫早市、森山町の事業推進派は、「排水不良」を声高に口にし始める。

「潮受け堤防」で湾を外海から遮断してしまえば、そこで高潮は止められ、高潮と洪水の複合災害も防げる。満潮と豪雨がかさなると

か、満潮による土砂の流入で干潟



が高くなったり、滞筋(干潟の中の川)が埋まって、沿岸低地の田畑が排水不良に陥るのも解消できる——というのが、農水省側や推進派側の主張だ。

「防災」を言うなら、堤防を強化すればよい

しかし、住民団体の「諫早干潟緊急救済本部」(山下弘文代表世話人)側は、一層の高潮、洪水対策が必要というなら、海岸、河川の堤防を強化したり、河川の土砂を浚渫したりすればよく、諫早湾干拓事業のようなものにはつながらない。現行の行政機構を前提とするなら、ほかの地方と同じように建設省が防災事業として取り組めば済む——と言う。

また高潮と洪水の同時発生を仮定したとしても、その時は、高潮を防ぐために「潮受け堤防」の水門は開けられない。そこへ河川の奔流がなだれ込み、調整池があふれかえたらどうするのか——と疑問を持つ。高潮の際に限らず毎



干潟にはカキの死骸が広がる。地割れがひどくなっている。それでも川筋に入ったところで船頭が「お、ムツゴロウが」と叫んだ。しかし、すぐ水にもぐってしまった

日の満潮時でも、規模は異なるが事情は同じだ。

十五年前の干拓事業の再々出発に伴って、研究者らで構成する「諫早湾防災対策検討委員会」が農水省に設置される。いま考えられているくらい規模の調整池では、水があふれる危険があることをこの委員会は八三年十二月付の中間報告書でまとめたが、内部文書にされてしまったことがこのほど報道された。「公共事業のための公共事業」に過ぎないとの批判を免れることはできないだろう。

既成の干拓地の設備はボロボロのまま放置

一方、森山町「干拓部落」の西村町議は、諫早湾干拓事業によって造成される湾内の新農地では、排水路が深く張りめぐらされ、排水はすべてポンプで行われ、冠水不安は完全になくなるという展望を、農水省側の計画を踏まえて威勢よく語ってくる。

しかし、そうならなぜ、この町議が現に暮らす既成の干拓地を、立派に営農できるように農水省に造り直させ、「排水不良」から解放されようとししないのか。そう問うと、町議も答えられなくなる。

平らな田畑が広がる諫早市から森山町、吾妻町あたりにかけての諫早湾沿岸部こそ、そうした基盤整備をするのに好適の条件を持っているのに、それがなされてない。欠陥商品をメーカー、つまり

農水省に直させるのは当たり前前の話なのに、である。

森山町には、海水の流入を防いだり、内陸から排水する樋門が沿岸の五カ所に備えられているが、満足に使えるのは先ごろまで一カ所もなかった。町役場で聞いた。

樋門の付近は浚渫もろくにされていなかったし、樋門のシャッターを上下させる設備は五カ所とも錆び付き、ぼろぼろになったまま放置されていた。破損しているものもあった。

そのような既成干拓地の人々に、諫早湾干拓事業の推進を叫んだり、干潟の保持を願う人々を罵倒する資格があるとは思えない。

森山町「干拓部落」には、耕作放棄された農地もある。四十六戸の入植者のうち今も営農しているのは二十六戸に過ぎず、七戸は、人もいない廃屋だ。干潟を丸ごとつぶして新干拓地を造っても、この森山町「干拓部落」の拡大延長に終わらない理由を探せない。

八二年十二月二十九日、故金子農水大臣が突然、農水省内の記者クラブに現れ、いまの約三倍の規模を持った事業の取りやめを宣言すると共に、

「農水省が長年にわたって、このような計画を続けてきたのは失敗で、官僚の無定見ここに極まる」と最大級の表現で、農水役人を糾弾した。森実構造改善局長らが横に控えていた。

故金子大臣は、巨億を投じてわざわざ諫早湾に多少の農地を造出

する必要もなければ、防災対策としての根拠も乏しいことを明確に語っていた。故人の目的には、この干拓事業は、農業土木利権をめぐって癒着した農水官僚、建設業者、政治家によってでっち上げられた、と映じていたようだ。

いま東京穀物商品取引所理事長に天下っている森実氏にこの辺のことを尋ねると、

「俺は知らんわ。一般論でなく諫早で言うならためにする議論だ」と述べる。

今年五月十三日、十四日、諫早湾周辺で大雨があった。内陸からの排水は調整池に受け入れられた後、干潮時を利用して「潮受け堤防」の外に容易に排出されるはずだった。しかし、長崎市の自然史

地点、地目、業種、進捗の概況、既成干拓地の設備、森山町にはこの命綱が切れてしまった。



研究者、布袋厚氏や救済本部の協力者は、諫早市から森山町、吾妻町にかけての既成干拓地を歩き、写真撮影をし、いかに広く深く冠水被害があったかを記録し、分析した（「諫早湾岸の排水改良効果実態調査」）。

五月の大雨の冠水被害 水門締め切りの影響？

それによれば、「潮受け堤防」内側の調整池の水位が大雨の影響で上昇していても、干満の差を利用して洪水排出のための水門操作がうまくいかず、調整池の水位が干拓地の標高を超す事態が九、十二時間にわたり生じた、という。

このことに関連して、干潮になって水門を開けた後も、調整池の水位の低下が遅かったことが指摘されている。水門の幅が狭いという構造欠陥が「潮受け堤防」にある、と推測されている。

さらに、既成干拓地の排水構造にも排水不良を起こす欠陥があることが発見された。

それより前に、農水省側は、大雨による被害は諫早湾奥にほとんどなかったと断定する表現の報告（「国営諫早湾干拓事業における排水改良効果」）を公表していたが、布袋氏らの実地調査が明らかにされて以後、初めの報告を多少修正する措置が取られた。

初めの農水省報告には、大雨の被害は皆無か軽微なことを証言する地元民の声も添付されていた。

その一人である森山町本村名の松尾東洋・地区長（報告では名前がカタカナ表記）は、

「私の家は一年に三回程度は床下浸水を繰り返していたが、今回の雨では全く満水はなかった」と証言している。松尾地区長の家は本村名の山手の高台にあり、記者も見ている。そこまで床下浸水したのなら、長崎県下の各都市はとっくに水没している。

これについては、森山町の鎌田総括理事から東京・築地のアエラ編集部に電話があり、松尾地区長の証言は、農水省出先機関職員による話の取り違えのようなので、地区長が虚偽の証言をしたわけではない、とする釈明がなされた。

農水省側、長崎県側の資料は、諫早湾干拓事業の防災機能を広報する材料として、七百六十人の死者、行方不明を出した四十年前の諫早大水害を引き合いに出す。しかしこの惨事は、諫早湾とも干潟とも何の関係もない。原因は、諫早市を流れる本明川の川幅が狭かったことや、江戸時代からの眼鏡橋などが流出物で詰まり、奔流を塞ぎ止めたためだ。農水省側や推進派政治家の発言には、その事実が、故意か無知か、消えている。

農水省は、本明川の河口正面に「潮受け堤防」という障害物を造った。この障害物は諫早湾の「眼鏡橋」だ。本明川の川べりを歩き、河口から「潮受け堤防」まで舟で行くと、その危険性がよく分かる。